

今井友樹さん

(記録映画監督・株式会社工房ギャレット代表)

伝統文化と自然保護の共存をめざして

映画『鳥の道を越えて』は、東濃地方に「カスミ網罟」が文化として根付いていた時代を追いかけたが、同時に禁猟になった後の密猟と野鳥保護運動との対立も浮き彫りにした。伝統文化の継承と自然保護は共存できるのか？ 監督の今井さんに話を聞いた。

鳥の通り道にカスミ網を仕掛ける

——映画のタイトルにもある「鳥の道」という言葉がとても印象的で、イメージがふくらみます。

これは、僕が子どもの頃に祖父から聞かされた言葉なんです。僕の生まれ育ったのは岐阜県の南東部、東濃地方の北端にある東白川村という山深い山村で、わずかな平地を耕しながら林業や炭焼き、狩猟などで生計を立てていたようなところです。一緒に畑に行って遊んでいると、仕事の手を休めた祖父が山の方を指し

て「あの山の向こうに『鳥の道』があつてな」と、昔の思い出を話してくれました。祖父が若い頃は、秋になると空が真っ黒になるほどの大群で渡り鳥が山を越えてやってきて、まるでひと筋の道のように見えたそうです。それを「カスミ網」で捕獲していたんですね。

——どんな種類の鳥を捕るんですか？
小鳥のなかでも比較的大型のツグミとかシロハラとか、ちよつと小ぶりのアトリとか、ヒワなどですね。僕の田舎では十一月初旬に山の講という山の神を祀る行事がありますが、ちよつどその時期になると渡り鳥たちが越冬のためにやってきます。どの鳥もピークは

一週間もないくらいで、それが次々と二週間ぐらいうちに集中して飛来する。だから、カスミ網罟の猟期というのは秋のほんの一時期だけなんです。

——カスミ網とは、どんな網なんですか？

大型の張り網で、かつては絹糸でしたが、その後はナイロンで作られるようになりました。木と木のあい

だに網を張ると、薄く霞がかかったように見えるので、カスミ網と呼ばれます。特徴は、網に何本か横糸が通つてあつて、たるみが作れることです。鳥が網にぶつかると、ポケット状のたるみのなかにすっぽりと入つてしまふ。たるみが浅いと暴れる鳥が抜け出してしまふので、捕る鳥の大きさによって横糸の位置をずらして、たるみの深さを調整します。

——網を仕掛けるのは、どんな場所ですか？

山の稜線のピークとピークのあいだの低くなった地点、峠とかダワ(鞍部)が鳥の通り道になっています。網を張って鳥を捕る場所を「鳥屋」と呼びますが、鳥屋はたいがい谷の奥まったどん詰まりにあつて、峠の頂上直下が網を仕掛ける網場となつています。僕の故郷では網の高さが二〜三メートルで、山の稜線に並行して何枚も張つていくのですが、地域や地形によってはもっと高く何段にも積み重ねるように張つたり、同心円状に並べて張るところもあつたようです。

鳥がくるのは未明から早朝にかけての時間帯が多く、村から鳥屋まで毎日通うのでは大変です。簡素な小屋を建て、猟師たちは鍋釜を持ち込んでシーズン中はそこで寝泊まりしていました。捕るだけでなく、囲炉裏



●いまい・ともき 1979年岐阜県生まれ。2004年に民族文化映像研究所に入所し、姫田忠義氏に師事しながら映像制作にかかわる。2010年に独立後、郷里の東濃地方を舞台にした初の長編記録映画『鳥の道を越えて』(93分)を制作し、2014年に公開。2018年には『坂網罟』と『夜明け前』の2作品を発表した。日本映画大学講師。(『夜明け前』自主上映会場の展示パネルの前で)